

squall



Akino

音が嫌い。

冷たいのが嫌い。

濡れるのが嫌い。

暗くなるのが嫌い。

私は雨が嫌いだ——。

空を覆う灰色の暗幕が堰を切ったように泣きだしたのは、私がイライラをぶつけるように蹴った小石が、水を張った田んぼに落ちて丸い波紋を広げた直後だった。

田舎育ちなら分かる水の匂いがして、あ、これは降るなどと思ったら案の定、広がった輪を覆い隠しながら一つ、また一つと透明な雨粒が水田を叩き始め、ついには大きな音を立てて辺りに降り注ぎ始めた。

まるでバケツに汲んだ水をひっくり返したかのような夕立に、私はたまらず近くにあった古い神社の境内へと転がり込んだ。

社殿を囲う小さな森。クスノキのアーケードの下を駆け足で走り抜け、せり出した拝殿の軒下へと避難する間にも、空から滑り落ちた雫が手足に当たっては砕け、私の輪郭を滲ませていく。

ようやく雨の当たらない所まで来た頃には、水を含んだ新しい制服が地肌にべったりと貼りついていて、気持ち悪いったらなかった。

冷たくなった衣類で体温を奪われないようにと、私は軋む板張りの境内に膝を抱えて小さく座り込んだ。

とっくに寒さで凍える季節は終わっているというのに、紫色だろう唇の間で私の上下の歯は噛み合わずにカチカチと音を鳴らし、肌は日本海の白波のようにざわざわと逆立っていた。

転校初日の今日。季節は水無月も末。

私の心の内を映したみたいに、軒下から見つめる先は見事なまでの豪雨。台風が来ているといったニュースは聞いていないし、西の空が明るいところを見ると、単に通り返りの夕立なのだろう。

最近の言葉で言うならゲリラ豪雨か。いや、あれは都市部だけの話だったろうか？

今の私にはどうでもいい話か。

銃弾ではないかと思える程の激しい雨粒が、バラバラと凄まじい勢いで神社の剥げた屋根瓦を叩いては、私の目の前を急流となって流れ落ちていく。

小学校の頃は”雨女“とあだ名を付けられ、酷くからかわれた。

遠足、運動会、学芸会、入学式に卒業式。私が重要だと思う用事や大切な行事のある日は、ことごとく雨に見舞われてきたような記憶がある。

小雨なら僥倖、曇りなら万々歳。もちろん、私が欠席すれば当たり前のように空は晴れた。

『お前のせいだぞ雨女！』

『うわ、おい近づくなよ！ 雨女がうつるだろ！』

雨が嫌いになるのも至極当然。

小さい頃の記憶はあやふやなので、どこまで雨ばかりだったのかは思い出せないが、今なら分かる言葉の暴力の積み重ねが、小さな私を確かに蝕んでいた。

原因はそんなところではないだろうか、と私は自己分析する。

今となっては昔の話。昔話、だ。

けれど、実はそうも言っていない。

家庭の都合で転校しこの町を離れ、そして十年ぶりに帰って来たのが昨日の朝。その日は見事に快晴だったし、今日だって天気予報は晴れ。朝からずっと晴れていたから、安心して傘を持ってこなかった。

転校してからというもの、私の雨女の性質はぱったりとなくなっていた。

だというのにHR後の帰り際、学校で昔のいじめっ子筆頭だった女の子にぱったりと出くわしてからおかしくなった。

『あ、雨女』

久しぶりに会った彼女に悪気はなかったのだろう。

「雨女……」

自分でも口にしてみる。

彼女は今ではさっぱりと性格のよさそうな女子高生になっていて、昔のことはごめんと謝ってくれた。ただ、記憶に一番強烈に残っていたあだ名だったから、つい口をついて出てしまったのだそうだ。

しかしそれからが踏んだり蹴ったり。

帰ろうとして歩き出した途端に階段で転んで腰をしたたかに打ちつけ、下駄箱で靴を履き替えるためにしゃがんで、立ち上がり際に開いていた隣の下駄箱の蓋に後頭部を強打し、部活をしていたサッカー部のボールが私の手提げ鞆を直撃し、中身が路上にぶちまけられた。

最後には濡れ鼠のご覧の有り様なのだから、本当に言葉の力って奴は始末が悪い。

「最悪」

いつの間にか口癖になっていたネガティブな言葉が、膝を抱えてうつむく私の口からこぼれる

。

言っても何も変わらないことが分かっている、つい口にしてしまう言葉。そして言うてから、ますます私の気分は下降線を辿るのだから、私は余程言葉の神様に嫌われているのだろう。

一向に止まない雨にうんざりしながらハンカチで濡れた髪を拭いていると、ふと、教室で聞こえてきた噂話を思い出した。

「知ってる？」と、二人の女子生徒は私が雨宿りをしているこの神社にまつわるおまじないのようなものを、休み時間に嬉々として話していた。彼女たちに言わせれば「びっくりだよねー！」なおまじないらしい。

「えー」とか「本当ー？」などを省いて要約すれば、この神社の鈴を鳴らして目を閉じ、願い事を思い浮かべながら時計を使わずに三分ピッタリで目を開けると、その願いが叶うというもの

。

根拠も何もない、よくある都市伝説の（都市ではないものの）類い。根も葉もない噂話だろうが、図らずも、私は時計を使わず三分を計る方法を知っている。

防水仕様(で良かった)の携帯電話のフラップを開くと、表示された時刻を確かめる。十年間変わらずに同じならそろそろ……。

カンカンカンカン――。

雨の音に混じって微かに聞こえる甲高いビープ音。大きな窓枠のような鳥居越しに小さく見える踏切の赤色灯が交互に点滅して、列車の往来を告げていた。

あのタイガーストライプの遮断機が降りきってから警報機が鳴り止むまでが、ちょうど三分なのだ。

実は踏み切りは小さな駅と隣接していて、そのせいでこの時間の踏み切りの待ち時間は長い。小学校の頃は、その駅で乗客が乗り降りし、ディーゼル車のエンジンが唸り声をあげて客車を引いていくのを、男の子の友達と一緒に今か今かと待っていたものだ。

” 雨女 “の私と遊んでくれる物好きな子供も中にはいたのだ。

お賽銭箱の前に移動した私は、罰当たりだなと思いつ拝殿に背中を向けて、鰐口というらしい大きめの鈴から垂れ下がった、色褪せてほつれた紅白の鈴緒を掴む。

ざあざあと音を立てて降り続けている夕立のスクリーン越しに、遮断機が降りてくるのが見える。

ガラン――。

「お手並み、拝見」

言って、私は目を閉じた。

そういえば、いつだったか私が一人で遊んでいた時に「んじゃあ一緒に列車でも見に行くべ！」と最初に笑いながら誘ってくれたのは、誰だっただろうか。

顔を思い出そうとしたら、昔の記憶が目蓋の裏にありありと蘇ってきた。

当時、私の家の四方には緑の絨毯をいっぱい敷き詰めた田園風景が広がっていて、この時期は蛙の合唱がうるさくて、近くでは話し声も聞こえない程だった。

家の近所で農家関係以外の建物といえば、私が今座っているこの古びた小さな神社くらいだった気がする。

広さは縦横に五間もあるかないか。私がこの町に住んでいた頃からぼろぼろで、参道を申し訳程度に囲んでいる禿かけの鳥居と、風化して何の動物だか分からなくなってしまった一对の狛犬がなければ、一見してここが神社だとは分からない。

しかし十年経った今では、周辺の地形はめっきり変わってしまった。

新しく洋風で小綺麗な家々が建ち、砂利道は舗装され、見慣れた田畑は半分近く埋め立てられて、蛙の声もめっきり聞こえなくなった。

そして、時代に取り残されたようにひっそりと残るこの場所すら例外ではなく、さっき駆け込んできた時に見た、もはや見る影もなくなった狛犬らしき石像の脇には、取り壊し予定と書かれた看板が立てられていた。

「最悪」

私はもう一度、目を瞑ったまま溜め息混じりに呟いた。雨に、ではない。

いじめっ子だった少女が変わったように、久しぶりの故郷はがらりと変わってしまった。今この瞬間も僅かずつ変わり続けているのだろう。けれど私自身は、十年経っても、昔と何も変わってはいない。

新しい環境。

新しい家。

新しい人間関係。

昔から馴染むという行為がとても苦手だった。

変わっていく世の中で、自分一人だけが取り残される感覚。それは、この古びた神社も私も同じなのだろう。

似た者同士。神社に親近感が湧くというのもおかしな話だ。

私が自嘲ぎみに口元を緩めると、唐突に遮断機の音が止んだ。

慌てて目を開けた私の視界に入ってきたのは、夏の夕方の激しい雨のカーテンではなかった。急に様変わりした景色に、私は思わず息を呑む。

さっきまであれだけ降っていた雨は、私が目を閉じていた僅かな間に止んでいたようだ。踏切の音は聞こえていたのに、いつの間にか雨が止んだ事にはまったく気がつかなかった。

分厚い灰色の雲からは所々で晴れ間が覗き、水滴をつけたクスノキの木立に柔らかな金色の光の束を投げかけている。

視線をクスノキよりも遥か上へとずらせば、七色の帯が私の悩みなどちっぽけだとでも言いたげに、視界の空の端から端までを弧を描きながら横切っていた。

「……………はあっ！」

息をするのも忘れる程見入るなんて、いつ以来の経験だろう。

しばらくぼんやりと何も考えずに雨上がりの空を見上げていた私だったが、ふと、あることを思い出した。

おまじないで、私はいったい何を願ったっけ？

そういえば昔を懐かしんでいただけで、何も願い事などしていない気がする。元々期待なんてしていなかったとはいえ、噂話を確認する云々以前の問題に、私は一人で苦笑いを浮かべる。

これでは願いが本当に叶うのかどうか、確かめようがない。

(しょうがない。雨も止んだし、帰ろっか)

へばりつく服を剥がし剥がし板張りの床から立ち上がると、私は自宅に帰ることにする。

しかしその前に、

「願いは叶ったのかー？」

両手を口に当てると、私は自虐を込めて遠くに見える踏切に向かって叫んだ。

別に誰かに質問したくて言った言葉ではない。ただ、おまじないをしたのなら、ここは神社なので聞いているだろう神様に、何か言ってやらないとすっきりしないからだ。

妙に固い頭も昔から変わらない。

なので、特に何の神様に向けてということにはなかったが、ここは先程の恨みもあるから言葉の神様に宛てて、だろうか。

さっきまで参拝するための拝殿に背中を向け、踏切に向かっておまじないをしていた不届き者だけに、神様への質問状もかなり凶々しかった。

それが可笑しくて、私は一人でくすくすと笑っていた。ろくな結果を招かない、言葉の神様への当て付けだ。

よしそろそろ帰ろうかと、水を吸って重くなった手提げ鞆を持ち上げると、不意にどこからか大きな声がかかった。

「なんだってー？」

「ひゃっ！」

さてはバチが当たったか！？ と焦って辺りを見回す私が見つけたのは、鳥居の前の道端で首

を傾げている、うちわを持って袖をまくった制服姿の少年だった。

「あ……」

「ん？ あれ、お前もしかすつど……」

十年前の列車好きの少年の顔が鮮明に蘇る。

そしてその少年をずっと横目で見ていた、十年前の私が浮かべていたであろう表情も。

「いやあ、ひっさしぶりだなあ！ な、な、俺のことまだ覚えてっか？」

「……うん」

一陣の風が雨の匂いを乗せて、微笑む私の鼻をくすぐっていった。

「覚えてるよ」

——私は雨が嫌いだ。

けれど雨上がりのひんやりと冷たいこの空気は、好き。